

地域文化の生成と変容 — 油津の「飛次郎延え漁」の事例から —

Generation and Transformation of a Regional Culture: The Case
with the Flying Fish Long Line Fishing on the Aburatsu Coast

稲野俊直・稲野寿幸・李 善愛

「飛次郎延え漁」は、宮崎県日南市油津沿岸を中心に小型漁船によって行われているトビウオ延縄漁法をいう。「飛次郎」とは、鹿児島県南部でとれるトビウオの一種の魚名から由来している。この漁法による主な漁獲対象物は商品価値の高いホソトビウオとハマトビウオである。トビウオ漁は、流通の発達でマグロの餌から鮮魚にその漁獲の目的が変わってきた。その上、夏から秋の間行われていた漁期が翌年の春まで伸びるようになった。

本稿は、このような社会、経済、生態という巨大な環境変化に対して戸惑いながら対応していくトビウオ延縄漁師のライフ・ヒストリーをとおして地域文化の生成、変容過程を明らかにする。ローカル資源のトビウオ漁が育む地域文化は、実践の民俗知として持続可能な資源利用において潜在的な意味をもつと思われる。

キーワード：トビウオ、飛次郎延え漁、地域文化、漁法の生成と変容、民俗知

目次

- I はじめに
- II マグロ延縄漁船の基地としての油津港
- III 飛次郎延え漁と漁民の暮らし
 - 1 トビウオの種類と漁獲量
 - 2 地域漁法としての飛次郎延え漁
 - 3 競い合う飛次郎延え漁師たちの一日
 - 4 飛次郎延え漁の季節変化
- IV 飛次郎延え漁の生成と変容
- V おわりに

I はじめに

日本の近海には約30種類のトビウオが棲息しており、日向灘には5, 6月にツクシトビウオ、7月頃にホソトビウオ、アヤトビウオ、9月頃にトビウオ、11月頃にハマトビウオなどがやってくる。その漁法にはトビウオ流刺網漁、トビウオ敷網漁、トビウオ延縄漁などがある。地元の漁師の話によると、トビウオのような回遊魚は延縄漁法がよくとれるという。

飛次郎延え漁業は明治37年頃から油津で松尾善助が操業を始めた。トビウオを延縄で捕る漁法は宮崎県内でも南部だけであり、他県ではあまり例をみない。飛次郎延え漁の主な漁獲対象魚種はコトビ（ツクシトビウオの地方名）で、油津ではコシナガ（ハマトビウオの地方名）と呼び、油津から鶴戸までの沖合を漁場としている。トビウオはクロマグロの餌に好適で、曳縄漁用として1940年頃1匹9円の高値もついたという（渡辺、1997）。

しかし、2005年現在、油津の延縄で捕れるトビウオは1匹50円で、網で捕れたトビウオと同じ値段であり、20年前の値段と変わっていないという。それに漁師の高齢化や後継者不足で油津には2005年現在、小型漁船2、3隻だけが飛次郎延え漁に携わっている。他は10隻ほどの曳縄漁船がのほりカツオ漁の休漁時期にトビウオ漁を行っている。熊本、福岡、県内の延岡などではまき網でとったトビウオをカマボコや天ぷらの原料としているが、油津では3枚おろしをして塩干しにするか、すりみ、刺身として利用している。

トビウオ漁は、マグロのように世界中で魚を追って捕るのではなく、産卵のため沿岸に来るのを待って捕る漁法である。そこで世界中に追って捕るマグロをグローバル資源とすればトビウオはローカル資源とも言えるだろう。こうしたトビウオは黒潮海流に乗って来る魚種としてカツオと同じくさまざまな視点から研究対象となってきた。渡辺一弘によると、屋久島のトビウオ招きの儀礼研究（下野、1984）、回遊魚と回遊漁民との関連を指摘する研究（野地、1986）漁撈技術に関する報告（川崎、1978）などがある（渡辺、1997）。

しかし、従来の研究は分布論を中心に静態的な視点から地域文化を取り上げている。そのため、本研究は宮崎県日南市油津飛次郎延え漁を事例にローカル文化の生成と変容過程についてあきらかにする。そして持続可能な資源利用のためには動態的な視点からローカル資源に対する民俗知へのアプローチを提案したい。

II マグロ延縄漁船の基地としての油津港

油津港は、宮崎県南部の日南市に位置し、東側に南北に伸びた岬と西側の低い山に挟まれた天然の入り江を形成している。南向きに開口した港の入り口の先には、宮崎県では数少ない離島の1つである大島が浮かび、外洋からの大きなうねりを防いでいる天然の良港である。古くは飢肥藩5万1千石のお膝元の港として栄えた。日南市は、生産量全国1位（平成16年度）の 飢肥杉の

名産地であり、油津の港はその昔、この飴肥杉の材木である弁甲材の積み出し港としても利用されていた。飴肥杉は、弾力があり水に強い特性があることから造船材として用いられ、飴肥藩の財政を潤していた。その名残は、油津の街中を流れる堀川運河に見られる。全長1,400mの堀川運河は、油津の町の北側を流れる広渡川と油津港を結んでいる。広渡川の上流の山林で伐採された飴肥杉は、筏に組まれて川を下り、河口付近で堀川運河に流し込まれ、港まで運搬されていた。しかし現在では、観光名物として定期的に弁甲流しが行われるだけになってしまった。また、油津港も昔ほどの活況ではないが、市内にある製紙工場の原料や製品の運搬基地としても健在である。

油津漁港は、黒潮の恵みを受けイワシ、カツオ、マグロなどの魚類が多く捕れ、特に昔から「マグロと言えば油津。油津と言えばマグロ」と称されていたほど、マグロ延縄漁船の基地として全国に名を馳せていた。

油津漁業協同組合（現在の日南市漁業協同組合、以下は日南市漁協で表記）の水揚げ記録によると、1926年にはマグロの年間水揚げ尾数が8,874尾もあったことが記録されており、当時のマグロ延縄漁船の操業隻数は45隻であった。さらに1940年には、操業隻数419隻によって35,180尾が1年間で水揚げされるようになり、油津漁港におけるマグロ水揚げのピークを迎えていた。その後、第二次世界大戦の勃発に伴い船舶の徴用とマグロ漁を支えていた船員の徴兵などによって、マグロの水揚げは激減していった。この頃は、最盛期には1日に1,000尾ものマグロが水揚げされていたのが嘘のような静かな港となっていた。

戦後、本格的な操業が再開されたものの戦前ほどの水揚げはなく、以前ほどの賑わいを取り戻すことはできなかった。このマグロの不漁が戦争の影響によるものか、或いは、マグロの生態的な原因によるものかは定かでない。

1980年代前半に漁具・漁法の画期的な改良とも言えるナイロンテグス繩の導入が行われた。これは、丈夫で透明な化学繊維に釣り針を結び付けた延縄であり、水中のマグロにはこの化学繊維がよく見えないため、警戒することなく餌に食い付くというものである。また、活餌を使った操業も行われようになったのもこの頃であり、キハダやビンナガを中心とした水揚げが盛んに行われるようになり、再び賑わいを取り戻し「マグロと言えば油津」と言われるようになった。現在、油津漁港には大型のマグロ延縄漁船だけでなく、カツオ、シイラ、トビウオ、アマダイといった季節の魚を捕って漁業を営む小型漁船が数多くある。

1959年と1997年の漁種別漁獲量を比較してみると、1997年にはイワシ、サバの漁獲量は激減したが、シイラの漁獲量が激増している。一方、トビウオの漁獲量はやや増加している（図1）。

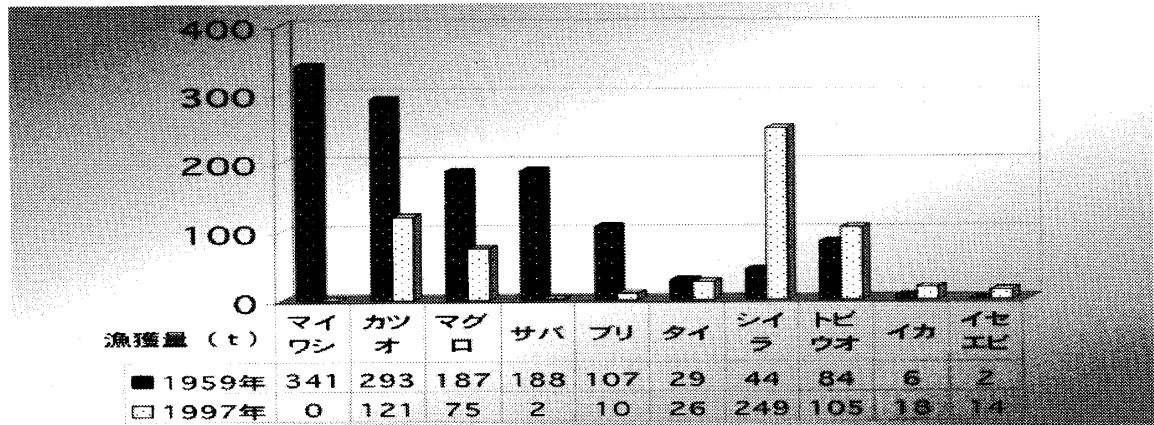


図1 日南市漁協の魚種別漁獲量

Ⅲ 飛次郎延え漁と漁民の暮らし

1 トビウオの種類と漁獲量

トビウオの種類は多く、日本沿岸だけでも28種類が知られている。トビウオの中でも産業上重要な位置を占める種類は、ホソトビウオ (*Cypselurus hiraii*)、アヤトビウオ (*Cypselurus poecilopterus*)、オオアカトビ (*Cypselurus suttoni*)、ハマトビウオ (*Cypselurus pinnatibarbatus japonicus*)、トビウオ (*Cypselurus agoo agoo*)、ツクシトビウオ (*Cypselurus heterurus doederleini*) など比較的大型で、資源量が多いものである。この中、日向灘で普通に見られるトビウオは、ホソトビウオ、トビウオ、ハマトビウオ、ツクシトビウオである。

種類別大きさは、ホソトビウオが全長28cm以下、トビウオ、ハマトビウオ、ツクシトビウオが全長35cm程度である。最大の種類は、ハマトビウオで全長50cmに達する。油津漁港に水揚げされるトビウオの種類については、詳細な分類が行われていないが、漁獲の主体となるトビウオは、ホソトビウオとハマトビウオであることは間違いないようだ。

トビウオの沿岸付近への来遊は、産卵のためであると考えられている。ホソトビウオの産卵時期は夏であり、ハマトビウオの産卵期は早春であることが知られており、後述する漁獲の主体となる種類の変化は、このためであると考えられる。また、ホソトビウオは1年で成熟して、産卵後は死んでしまうことが知られている。卵には、付着糸があり、岩礁や海藻に付着する。

トビウオは、九州北部や山陰地域ではアゴという地方名で呼ばれている。アゴは、天日で丸ごと乾燥させて、料理の出し汁として用いられ、良質の出し汁が取れることで有名であるが、日向灘で獲れる大型のトビウオは、刺身で食べることができ、透き通った白身で非常に美味しい魚である。勿論、トビウオは煮物、焼き物でも美味しく食べることができるし、開きにした乾物としても流通している。

トビウオは、童謡にも歌われているように、翼のような大きな胸びれと腹びれを持ち、空中を勢いよく滑空することで知られ、一度の滑空距離は、400~500mにもおよぶとされている。流線型の魚体は、空気抵抗が少なく、尾びれは、滑空中でも水を掻くことができるように下葉(尾

びれの下側) が長く発達していて、海原を滑空するのに適している。トビウオは、捕食者であるシイラなどの大型魚から身を守るために滑空して逃げるとされているが、海が荒れた時や大量に來遊してきた夜などは、勢い余ってコントロールを失ったトビウオが漁船内に飛び込んで來ることもしばしばある。

宮崎農林統計資料によると、トビウオの全国総漁獲量は約7千トンであり、県別には鹿児島県が1500トンでもっとも多く総漁獲量の約2割を占める。その次が長崎、島根県の順で千トン以上である。宮崎県は292トンで総漁獲量の2%を占める。その約8割が宮崎県南部地域で獲れており、日南市漁協の延縄漁で獲れるトビウオの漁獲量は約105トンで宮崎県総漁獲量の約4割を占める（宮崎県農林統計協会 1997）。

2 地域漁法としての飛次郎延え漁

トビウオ漁は油津のように延縄でトビウオを漁獲する地域は希で、主に定置網、刺網などで漁獲されているため、回遊ルートなどの生態については未だ研究途上である。また、その種類や繁殖生態についても研究例が少ない魚でもある。飛次郎延え漁は、漁期が長く1年の半分近くを占めている（図2）。

延縄漁は尻糸程のクレモナ繊維の紐を幹縄として、スタレ状に100本の枝縄を連ねてある。枝縄同士の間隔は約3mで、枝縄の長さは70cm程度である。この枝縄の先に釣針を結び付けたものが1つの延縄箱に納められている。作業時には、枝縄4～6本間隔で小型の浮きを幹縄に付けながら海に投入して行く。この小型の浮きは、トビウオが釣れる水深を縄が漂うように加減しながら取り付けられる。さらに適当な間隔で目印となる旗浮きを取り付けて行く。

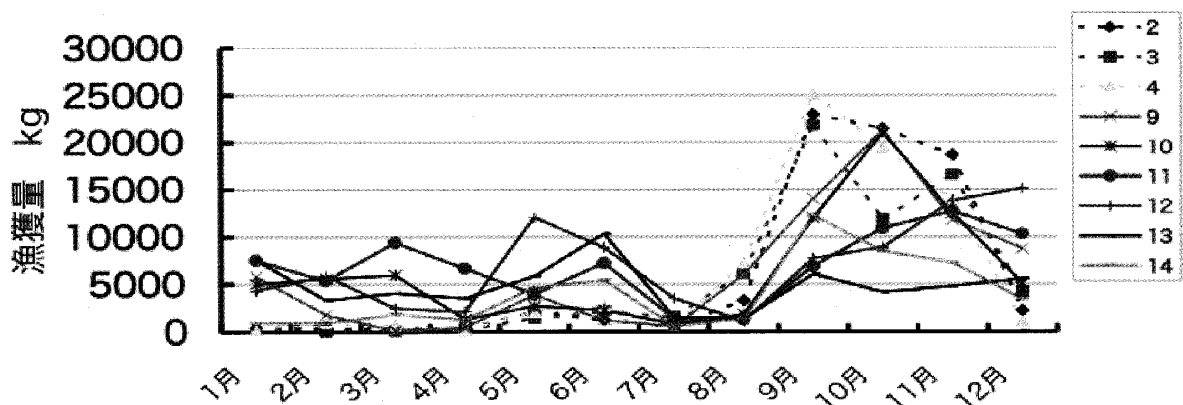


図2 日南市漁協の月別トビウオ類の漁獲量（1990～1992年と1997～2002年）

トビウオ延縄は、非常に簡単な仕組みであるが、繊細であるため通常の延縄に用いるようなラインローラーという動力で縄を巻き上げる機械は一切使用できず、操業の全ての行程が手作業で行われている。言い換えれば、原始的な延縄漁法である。このため、操業の能率が上がらず地道な漁業であるため、現在では、比較的若い漁師には敬遠されがちである。

3 競い合う飛次郎延え漁師たちの一日

出漁は、日の出の2~3時間前である。操業海域は、前日の漁況を参考にして選択される。目的の海域に到着すると、まず、トビウオが居そうな潮目を捜すことから始める。その際に漁師達は、風向、風速、水温や水色を中心に前日の状況と比較しながら、また、漁船の接近に驚いて時折飛び上がるトビウオにも注意しながら操業の基準となる潮目を探索する。潮目が見つかり、その潮目に沿って先着順に列に並び夜明けを待つ。この時、こだわりを持つ漁師の中には、潮目の大きさ、潮目の方向と風向の関係など他の漁師とは異なる目線でより良い漁場を選ぶ者もいる。

夜が明けると漁師達は、潮目の方向と風向を考慮して、お互いの延縄が交差したり、接近しすぎたりすることがないように延縄を漁場に投入（投縄）して行く方向を決め、一斉に漁船を走らせながら投縄して行く。漁師達の中には、日々平凡な操業に刺激を求めて、仲間同士で投縄の速さを競い合い、操業の腕前を試したり、無線を使ってコミュニケーションを取ったりしている者

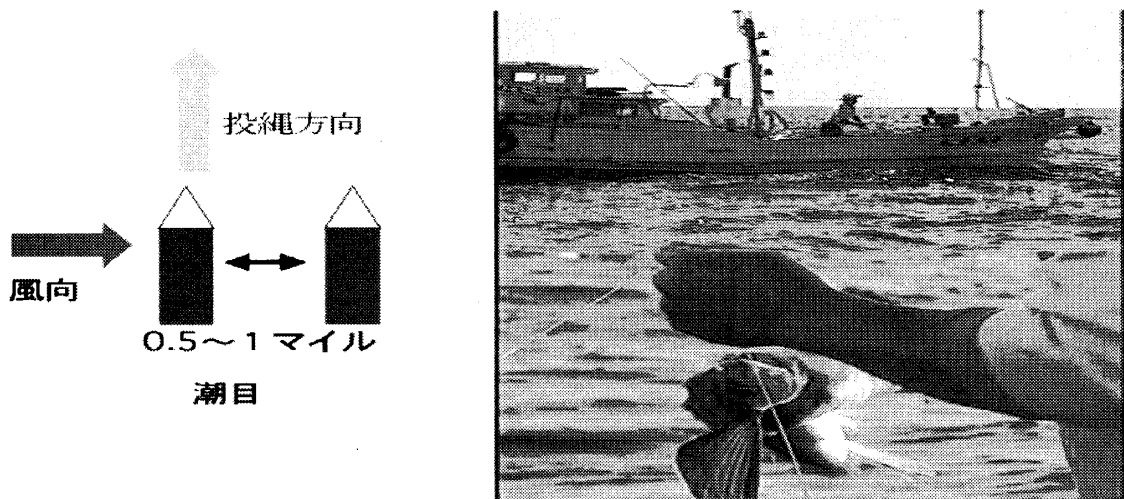


図3 潮目と風向と投縄

また、この飛次郎延え漁は、投縄時には釣針に掛かったトビウオが逃げようとして海面をピョンピョン跳ねる姿が見られるため、投縄しながらも延縄を漁船に引き揚げる（揚げ縄）時の漁獲量を予測することができる漁法でもある。1隻の漁船の使用する延縄の数は10箱、所要時間は約40分、距離にして約2マイル程度投縄する。その後、延縄は20~30分間放置される。その間にも漁師達は、延縄の目印として取り付けられた旗に沿って双眼鏡を覗き、投縄時と同様にピョンピョン跳ねるトビウオの姿を確認して、その数を数えることによって漁獲量を予測し、鮮度保持のため漁獲量に合った水を準備する。

揚げ縄は、通常2時間半程度かかるが、その間にも他の船舶が延縄の上を通過したり、潮流の歪みやトビウオを捕食する魚の影響を受けたりして、幹縄が切断されたり、纏れ合ったりして3時間以上もかかることがある。従来からトビウオの捕食魚として漁師達に嫌われているシイラに加えて、近年では、サメ類が異常に多く来遊するようになり、釣針に掛かったトビウオを食べる

光景を頻繁に目にするようになった。そのサメの様子は、まるで映画のワンシーンのような暴れぶりで、延縄はバラバラに切断されることもしばしばある。サメ類は、世界的な資源の枯渇が叫ばれ、種類によってはワシントン条約の対象種とされているが、トビウオの漁場では、そのようなことを全く感じさせないサメの存在に頭を痛める漁師も多い。

揚げ縄を開始して間もなく、「一箱揚がった。20匹食ちよった」というような漁況の中間報告が無線機のスピーカーから聞こえてくる。漁師達はその声を聞いて「はあ」と溜息をつく人もいれば、「俺の方が多いい」と思いながら、自らの漁獲状況を報告し合う。順次、延縄が揚げられて行くと、トビウオの漁獲量は徐々に増え、それに合わせて、延縄の縫れや切断箇所も徐々に増えて行く。漁師達は、漁獲の喜びと帰港後の延縄修理の苦労を想像しつつ、トビウオと縫れを見ながら複雑な心境で延縄を揚げる。

そして揚げ縄が終わると、漁師達は、帰港の途中で延縄全体の漁況の変化を無線で報告し合いながら、翌日の漁場の形成位置を予測しつつ、お互いに意見交換を行う。帰港は、正午頃、無事入港したことを漁協に報告して、漁船は水揚げ場に停泊させる。ここでも先に入港した漁船の水揚げ状況を確認して、当日の漁場の全体像を把握することができ、これによって翌日使用する延縄の数や出漁時刻が最終決定される。漁期を通して、最盛期には漁船1隻で1日に100～200kgものトビウオが漁獲される。この量は、漁期前半に漁獲されるホソトビウオであれば400尾程度、漁期後半に漁獲されるハマトビウオであれば300尾程度に相当する。

水揚げ後は、翌日の準備を行うことが漁師達にとっては一苦勞である。漁場での揚げ縄の際には、延縄はトロ箱という木箱に収容される。これを幹縄と枝縄、釣針を整然と並べて収める縄箱という箱や籠に移し換えなければならない。この作業は、熟練した漁師でも、1箱に30分程度要し、以前は、一家総出で2～3時間掛けて行われていた。しかし、現在では、漁師の高齢化と担い手不足が進み、漁師夫婦と親しい隣人という顔ぶれで作業して4～5時間を要する者もいる。漁家の担い手不足は、深刻化しており、人手を要するトビウオ漁を諦めて他の漁業に転換する漁師もいる。このように漁師にとって負担となる作業も、一家総出で行われていた頃は、漁の様子を話したり、夫婦、親子の会話がでたりする一家団欒の場であったことは間違いない。

4 飛次郎延え漁の季節変化

飛次郎延え漁の1年は、7月のホソトビウオを主体とした漁獲から始まり、10月のハマトビウオが漁獲される頃をピークにして、11月下旬に終了していた。しかし、近年では、漁期が長くなり3～4月まで漁が続けられ、温暖化の影響ではないかと懸念されている。

以前は、冬季になると種子島や屋久島の温暖な海域にハマトビウオを追い求めて出稼ぎに行く漁師が多かった。しかし、気温が低く出稼ぎには厳しい時期でもあるため、トビウオの漁期が長くなり地元で操業できるようになったことは、漁師達に歓迎されている。このように行われるトビウオ漁は、トビウオが産卵のために沿岸の砂底や海藻のホンダワラ類の繁茂した海域に来遊す

ることに合わせて行われてきた。

梅雨明けとなる7月下旬、マリンプルーの水色良好な28~29℃の水温帯で漁が始まる(図4)。南寄りの風が吹く日が多いシーズン当初は、漁獲量は少ないもののトビウオが高値で取引されるため、魅力を秘めた時期である。しかし、比較的漁場が遠い時期であり操業隻数が少ないため、漁況に関する情報が少なく漁場の特定が難しいという欠点もある。この頃に漁獲されるトビウオは、ホソトビウオを主体に3~4種類の小型のトビウオが混獲されるが、小型のトビウオはホソトビウオのような人気はなく、商品価値は殆どないと言っても過言ではない。

8月、お盆を境にして海上では北寄りの風が吹くようになる。この風の影響か否か、ホソトビウオは徐々に沿岸に接近するようになり、比較的近い海域に漁場が形成され本格的な漁獲となる。9月に入りホソトビウオの漁獲がピークを迎える頃、その年の豊漁と豊作に感謝しながら、秋の大漁と五穀豊穡を願う「十五夜綱引き」の綱練りが始まる(図5)。大自然の恵みの中で生活している漁民は、祭りを通して神に豊漁を感謝し、大漁を祈願していた。しかし、今ではこのような伝統的祭りも神に感謝祈願することより、祭りを通じて地域の繋がりを深めたり、大人と子供のコミュニケーションの場として利用したり、地域興しの手段として催されるようになってきた。それでも、少子化の影響からか、参加者は年々減少し、祭りの継続が難しい状況にある。この頃、磯では、イセエビ漁が解禁となり、港では夜も明けやらぬうちからイセエビを網から外す作業が行われ、活気溢れる港の風景を目にすることができる。



図4 梅雨期の日向灘水温帯

図5 十五夜綱引きのための綱練り

10月、水温が24~25℃になった頃、ホソトビウオに混ざってハマトビウオが姿を現すようになる(図6)。その後、水温22~24℃になった頃にハマトビウオも本格的に漁獲されるようになり、トビウオ漁のピークを迎える。この頃からトビウオは、水色良好な水帯とやや不良な水帯の双方で漁獲されるようになるため、個々の漁師の経験と勘が漁獲を左右するようになる。そのため、この時期は、漁師達が漁獲量を競い合う時期でもある。特に、この頃に吹く「青北」と呼ばれる

北東風によって、海上は頻繁に荒れるようになり、出漁の可否も関係して漁獲量を大きく左右する。この青北とは、10月、11月にかけて晴天の日に日向灘の海上で吹く北東風のことである。青北は、夜明けと同時に徐々に強くなり、正午頃には風速12m（12m/秒）程に達し、午後3～4時頃から徐々に弱まり、夜には風の状態に戻ることを繰り返す（図7）。この時期、漁師達は、青北の規則性を熟知し、風の条件の良い時間帯を選んで操業する。

そして11月中旬、地元では乙姫様と呼ばれ、親しまれている吾平津神社の秋の大祭が催される頃を境に（図8）、西寄りの風が吹く日が多くなる。風を漁船の横に受けながら投縄するトビウオ延縄は、潮目と平行に投縄するようになるため、同一の水帯或いは狭い水帯での操業を余儀なくされる（図9）。このため、漁獲量が減少する時期でもあり、飛次郎延え漁は終わりを迎える。

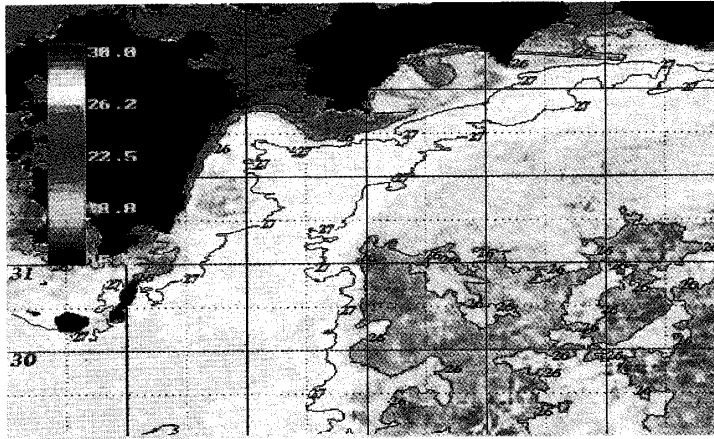


図6 秋の日向灘海水温

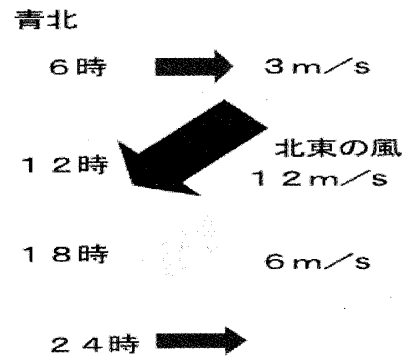


図7 日向灘に吹く北東の風

しかし、近年では翌年の3～4月までハマトビウオだけの漁獲が続くようになってきた（図10）。この時期の飛次郎延え漁は、油津の漁師達にとって未経験であったため、当初は漁師達の戸惑いもあり、漁場選択が非常に難しく、極めて不安定な漁況であった。現在では、この漁期の延長は、10年程度継続しているため、漁師達は経験を積み、漁獲に反映させることができるようになり、冬季から春季の漁として定着している。



図8 秋の大祭が催される吾平津神社

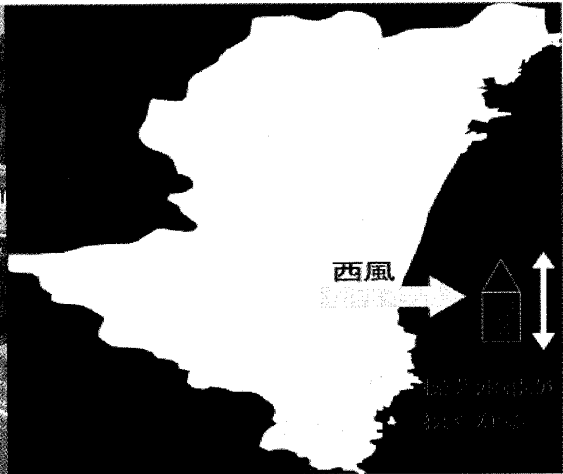


図9 西風とトビウオ延縄漁

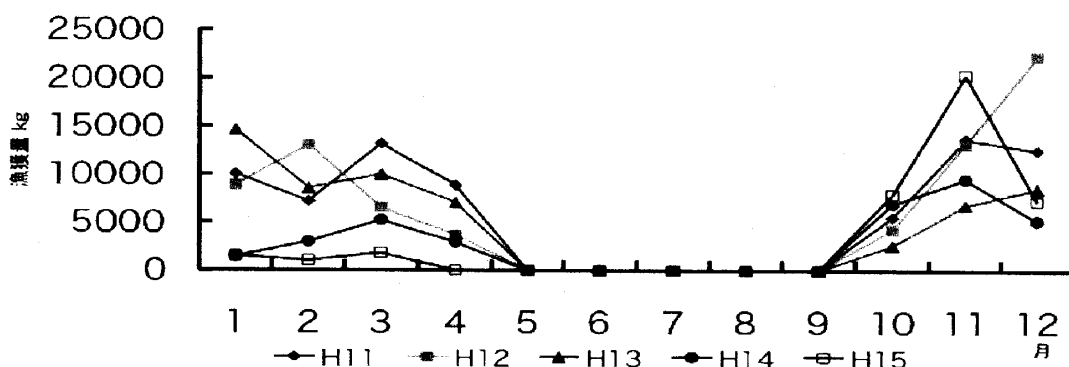


図10 ハマトビウオの漁獲量の推移

IV 飛次郎延え漁の生成と変容

トビウオ延縄漁のことを油津では「飛次郎（ひじろう）延へ」ともいい、現在の漁法の形態は70年ほど前から行われるようになった。地元漁師の中には、この漁法が昭和初期に高知県から伝わったと記憶する者もいる。また、鹿児島県種子島地方では、ある種のトビウオをヒズロウという地方名で呼んでいることから、油津でいう「飛次郎（ひじろう）」は、鹿児島県南部から伝わったトビウオの地方名であると考えられる。

初期頃の延縄漁法には、チョロ船という帆掛け船が用いられていた。このチョロ船は、全長8m、帆の高さ9mの小型のものである（図11）。この船には、必ず2人以上が乗り組み、一方が動力となる櫓を操り、他方が延縄の投縄・揚げ縄を行っていた。チョロ船での飛次郎延え漁は、鮮魚として食卓に供給することを目的としておらず、主にマグロを釣るための餌用のトビウオを漁獲する目的で行われていた。チョロ船による操業は、風に大きく左右されることから陸からの強い風や無風にはかなり苦戦をしいられ、中には出港したきり帰ってこなかった漁師もいたほどである。

しかし、殆どの漁師は風や潮流を上手に読み取り、帰港時には出港した港にかかわらず、入港に最適な港に向かった。当時は、無線のような通信手段が普及していなかったため、チョロ船の漁師は、風任せ、潮任せに入港した港から家族に連絡を取ることもできなかった。そのため、チョロ船に乗り込んだ漁師の家族は、無事を信じつつも不安な夜を過ごすこともあった。このチョロ船は、漁船の近代化に伴い姿を消してしまったものの、近年、観光名物として復元され、当時のままの優雅な姿を現在に伝えている。

戦後、漁船の動力として内燃機関の普及が進み、初期の焼玉エンジンを経て、現在では殆どの漁船がディーゼルエンジンを搭載するようになり、操業率は飛躍的に向上した。また、船体もエンジンの高性能化に合わせるように、木造船からFRP（Fiber Reinforced Plastics）船に代わってきた。さらに、近代化した漁船には、無線機は勿論、水温計、2点以上の地上基地局からの電波を受信して自船の位置を確認するロランC、カーナビの普及で馴染みの深くなったGPS（Global Positioning System）、方向探知器、水中の音響反射を利用して魚影を捜す魚群探知器、自動的に舵

を修正しながら目的地まで船を操船する自動操舵装置など、様々な機器が搭載されるようになり、漁業者の労働環境は良くなったと言えるだろう。視点を変えれば、漁師が自らの経験と代々伝えられた技術は、その存在感が薄れ、五感を研ぎ澄まし獲物を狙う漁師の姿は消えつつあるのかも知れない。

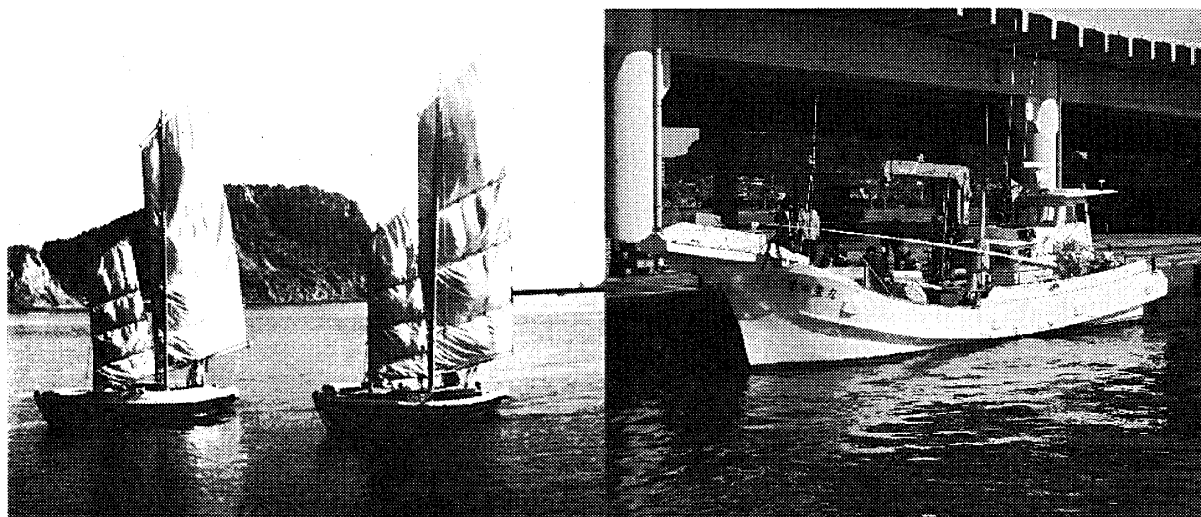


図11 チョ口船 (左) ・FRP船 (右)

漁業の近代化が進む中、トビウオ漁もマグロの餌を得るという目的ではなく、トビウオを消費市場の流通に乗せて鮮魚として本格的な供給へと変化していった。そのため、漁師達は漁獲量を増やすための工夫を行った。

初期の頃にトビウオ延縄の餌として使用されていた淡水産エビ類のテナガエビでは、身が柔らかいため釣針に刺した時の歩留まりが悪く、漁獲量はなかなか増えなかった。加えて、テナガエビの絶対量が少ないことから漁師達は思うように出漁できず、早朝の出漁に合わせてテナガエビを買い付けるため、漁師達は先を争って夜中から地元広渡川の川エビ漁師の元へ行った。

さらに、地元でテナガエビが入手困難になると、30kmも離れた川まで買い付けに行っていた。そのため、当時は資源が豊富で容易に入手できたイセエビを餌として取り入れ、飛次郎延え漁の餌不足解消が図られた。しかし、歩留まりの悪さは、テナガエビ同様であった。今となっては、イセエビをトビウオ漁の餌として使うという行為は、非常に贅沢なことであるが、それほどイセエビが豊富に獲れていた証拠でもある。

その後、歩留まりの良さという観点からイカの切り身が利用されるようになったものの、本格的に取り入れられるようになったのは、冷凍保存設備の普及や遠洋イカ釣りが盛んになった頃からであった。イカを用いた餌は、20mm×5mmの短冊型に切り揃えられ、本格的なトビウオ鮮魚の供給が行われるようになった頃には、1日に千数百個も必要になった。イカを短冊に切る作業は、繊細さが要求されるため漁師達にとっては辛い作業である。そのため、包丁を捌きに優れた女性の腕前は、トビウオ漁にとって欠くことができない存在となった。

現在のトビウオ延縄の餌には、一工夫加えられている。それは、イカの切り身を食紅で赤く染めるというものである（図12・13）。このことによって、釣針に刺した餌を海中に投入した際に食紅が海水中に溶け出して、その様子は、生きているイカの子が驚いて墨を吹きながら逃げように見える。これらの餌の工夫によっても漁獲量は増え、先人の知恵と苦勞の跡が伺える。



図12 操業で絡んだ網を元通りにする



図13 赤紅で染めたイカの切り身

V おわりに

黒潮流域を主な生息域とするトビウオにとって、日向灘は良好な生息域であるに違いない。そのトビウオから恩恵を受ける油津の漁師にとって、異変とも取れる季節はずれのトビウオの来遊は、喜ばしいことではあるが、自然からの警鐘であるかも知れない。

また、時代とともに改良・変遷してきた飛次郎延え漁は、油津の小型漁船で操業する漁民にとって、地域に合った漁法であることは疑う余地がない。

謝辞

本稿は、2004年11月20日、宮崎公立大学交流センターで開かれた第8回生き物文化誌学会宮崎例会で発表した内容を添削したものである。発表の際には秋道智彌（総合地球環境学研究所教授）先生から貴重な意見を頂いた。また、本研究の調査には松浦氏を初めとする日南市漁業協同組合の組合員並びに職員の皆様から快く協力して頂いた。執筆にあたりお世話になった以上の方々にはこの場を借りて併せてお礼を申し上げる。

参考文献

- 阿部宗明監修 1987 『原色魚類大図鑑』、北隆館、pp306-310。
油津漁業協同組合 1972 『創立70年史』、日南美術プリント社。

地域文化の生成と変容－油津の「飛次郎延え漁」の事例から－（稲野俊直・稲野寿幸・李善愛）

稲村桂吾 1960 『漁船論』水産学全集第5巻、恒星社厚生閣、pp11-16。

小野重郎 1990 『南九州の民俗文化』、法政大学出版局。

下野敏見 1984 『トビウオ招き』、八重岳書房。

末広恭雄編 1977 『水産ハンドブック（増補版）』、東洋経済新報社。

瀬戸内海水産開発協議会編 1997 『瀬戸内海のさかな』、p23。

日本ナショナルトラスト観光資源保護調査報告書 1997 『油津の町並みと堀川運河』、日本財団図書館。

益田一，尼岡邦夫，荒賀忠一，上野輝彌，吉野哲夫編 1988 『日本産魚類大図鑑（解説）』東海大学出版、pp79-82。

宮崎農林統計協会編 1997 『宮崎県海面漁業の動き』、宮崎県。

渡辺一弘 1997 「宮崎県沿岸部の漁法について」『宮崎県地方史研究紀要』第23号、宮崎県立図書館。

* 稲野俊直：宮崎県水産試験場小林分場主任研究員

* 稲野寿幸：宮崎県日南市漁業協同組合監事・トビウオ延縄・カツオ曳縄漁師